

## 地域主体の持続的まちづくり活動の動向と特性 その9

日大生産工(院) ○杉田 悠登 同 池田 直輝  
大和ハウス工業 井出 綾香 福岡大学 野田 りさ 日大生産工 北野 幸樹

### 1. はじめに

本研究は前稿「地域主体の持続的まちづくり活動の動向と特性 その8」に引き続く研究である。前項では、地域居住者の生活、まちに対する意識や現状を把握し、物理的環境と社会的環境の環境要因と地域居住者のまちへの意識の関係を分析し、地域に対する想いの形成過程・地域主体の持続的まちづくり活動の傾向的特徴について整理し、環境要因と地域への想いの形成の相補的關係と今後のまちづくり活動の展望を報告した。

本稿では、地域居住者が地域に対して愛着を形成する上で、環境的要因がどのように寄与しているかを整理し、居住形態・職場環境・移動手段などから普段の地域居住者の行動を解体して整理することで、地域居住者同士の交流の発展とまちづくり活動の展望を報告する。

### 2. 調査概要

調査対象・調査方法は、前項の「地域主体の持続的まちづくり活動の動向と特性 その8」と同様である。

### 3. 地域交流とまちづくり活動の参加度

地域居住者同士の交流の頻度に対するまちづくり活動の参加の有無について下記の図1に示す。図1から、地域居住者同士の交流頻度は、まちづくり活動への参加の有無によって明らかに異なる。まちづくり活動に積極的に参加している地域居住者は、通常から地域仲間とのコミュニケーションの機会が多いことが確認できる。

一方、まちづくり活動に参加していない地域居住者については、地域仲間との会話の頻度が低い傾向が見受けられる。これはまちづくり活動が地域内のコミュニケーション促進に寄与している可能性を示唆している。地域居住者同士の交流がまちづくり活動に参加することによって促進され、地域社会全体の連帯感と協力関係を強化していると考えられる。

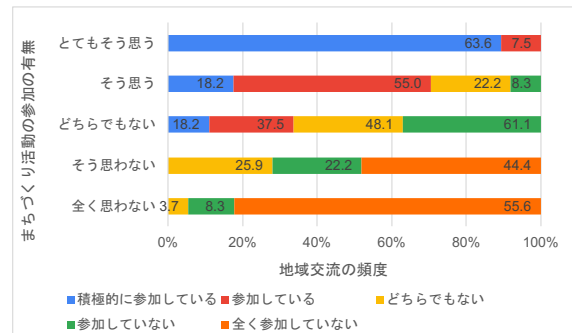


図1. 地域交流の頻度とまちづくり活動の参加の有無 (n=123)

### 4. 地域交流とまちづくり活動の認知度

地域居住者同士の交流の頻度に対するまちづくり活動の認知度について下記の図2に示す。

図2に示されるように、地域居住者同士の交流頻度とまちづくり活動の認知度には明確な相関関係が見受けられる。図1で示唆されたように、地域内で頻繁にコミュニケーションを取る住民ほど、まちづくり活動についての認知度が高いことが明らかである。一方、地域居住者同士の交流が限られている住民ほど、まちづくり活動に対する認知度が低いことが示されている。

この関連性は、地域の交流がまちづくり活動の広報や情報共有に寄与していることを示唆している。地域内でのコミュニケーションが盛んである場合、住民はまちづくり活動に関する情報を容易に入手し、その重要性を認識しやすいと言える。地域居住者同士のコミュニケーションは持続的まちづくり活動に大きく寄与していることがわかる。

一方で、地域内でのコミュニケーションが不足している地域では、まちづくり活動についての情報伝達が十分でない可能性がある。したがって、まちづくり活動の促進と地域コミュニケーションの強化は、地域社会の持続的な発展に向けた重要な要因となると考える。

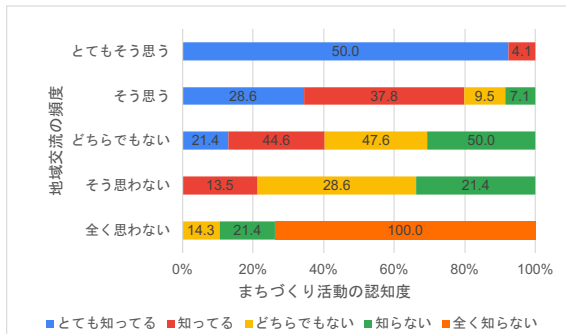


図2. 地域交流の頻度とまちづくり活動の認知度(n=126)

### 5. 地域交流が生まれる環境的要因

地域交流が行われるのは、地域居住者のくらしの環境によって左右されるのかを整理していく。

図3から、地域住民の居住形態の選択肢において、92%の人が「持ち家（戸建て）」を選択したことが分かる。また、「持ち家（戸建て）」と回答した住民が、選択肢「とても思う」と回答した唯一のグループである。

一方、選択肢「持ち家（マンション）」を選んだ住民たちは、全員が「そう思う」と回答している。これは、集合住宅独特の共有空間（例：廊下やエレベーターなど）が、住民間のコミュニケーションを促進する要因として考えられる。

次に環境的要因として普段の移動手段について整理する。地域交流の頻度と普段の移動手段については図4に示す。

「徒歩」「自転車」「自家用車」「バス」「電車」の交通手段に関するアンケートを実施し、図4からはこれらの項目において特定の順序が地域居住者同士の交流と関連していることが明らかになった。この順序は、「徒歩」が最も高く、次いで「自転車」「自家用車」「バス」「電車」と続いている。一方、「電車」と回答した人の中で地域居住者同士の会話が少ないと回答した人が60%だった。電車内では会話をすることができないことや地域住民と遭遇することが少ないことなどからこのような結果になったと考えられる。

結果から、地域居住者同士が身近な環境で出会いやすいことが、地域交流の活性化に重要な要因であることが示唆される。特に「徒歩」や「自転車」の利用者は、地域内で他の住民と直接的な交流の機会が多いため、地域社会の連帯感とコミュニケーションが高まっているといえる。

次に環境要因として通勤・通学先について整理する。地域交流の頻度と通勤・通学先については図5に示す。

職場が「自宅」「市内」と回答のあった地域居住者の地域居住者同士の会話は行われている傾向にあることがわかる。一方で、職場や学校が住んでいる地域から遠く離れている住民においては、地域居住者同士の会話が少なくなっていることがわかる。この要因として、職場や学校が住んでいる地域から近いという状況が、地域居住者同士のコミュニケーションの発生に有利である可能性が考えられる。このような場合、通勤や通学において徒歩や自転車などの身近な移動手段が主要であり、地域内でのコミュニケーションが生まれやすい。図4からも、徒歩や自転車を利用する住民が地域居住者同士の交流が多いことが示されており、この点が一致している。

地域まちづくりにおいて、職場や学校と住んでいる地域を近くにすることや、身近な移動手段の提供が、地域居住者同士のコミュニケーションを促進する上で有用であることを示唆している。

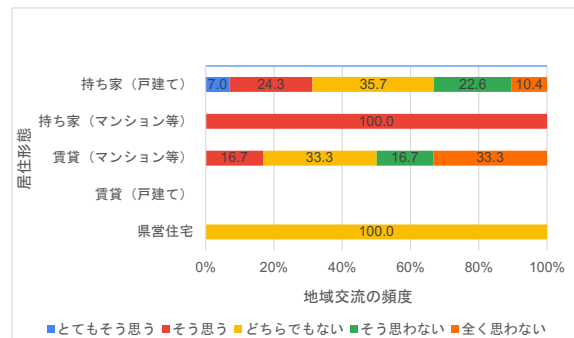


図3. 地域交流の頻度と居住形態(n=124)

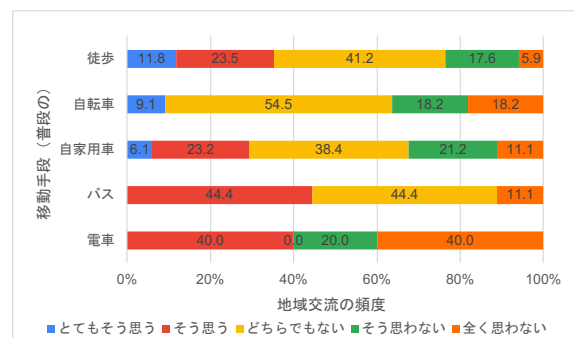


図4. 地域交流の頻度と普段の移動手段(n=146, 複数回答)

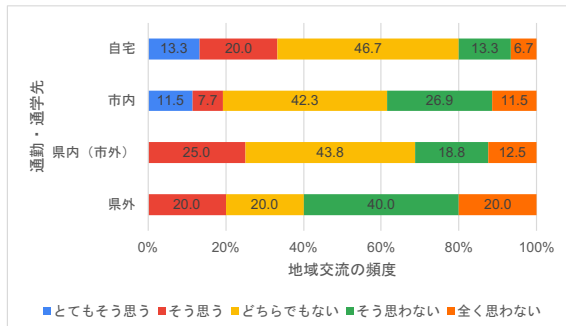


図 5. 地域交流の頻度と通勤・通学先 (n=62)

## 6. 地域居住者が交流する人数と交流内容の関係性

地域居住者同士の実際の交流人数と交流の内容、そして交流の満足度について整理する。交流人数とその交流の詳細について図6に示す。

交流内容の主要な形態として、「立ち話」が大半を占めていることがわかり、交流人数との関連性は見られなかった。その次に、アンケート回答において「訪問」と「おすそ分け」が多く挙げられた。図4を考慮すると、地域居住者の中で「徒歩」や「自転車」を利用している人々が、特に「立ち話」を交流形態として選択していることが明らかとなった。

また、地域活動や自治会役員の会議に参加している住民についても地域活動に関与する住民は多くの地域居住者と交流を持っており、地域コミュニティの中で積極的な役割を果たしている。

次に地域住民の交流に対する満足度について整理する。交流人数と交流に対する満足度について図7に示す。

地域居住者同士の交流人数が多い地域居住者において、交流に対する満足度が高い傾向が見受けられる一方、少数の地域居住者が「満足していない」と回答したことがわかった。地域住民は地域居住者同士の交流に対して必ずしも多くの人と交流したいというわけではなく、むしろ程々の交流を好む傾向があると言える。地域の交流において、多くの人との交流は社会的つながりを深める一方で、過度な社交活動を求めない住民も存在する。少数の親しい友人や隣人との交流を重視し、地域社会の一員としての安心感を享受している可能性がある。

「今後、他の人との交流を増やしたいか、または減らしたいですか?」というアンケートに対する回答を集計し、それらを5つの特性に分類した。(※表1)

分類は「高齢者のための交流」「交流を増やしたい」「有益な交流」「現状維持」「程良い

関係性」の категорияに分けられ、その結果、有益な交流を望む回答が最も多く、次に現状維持という回答が多かった。「有益な交流」を求めている回答者は、若者との交流を増やしたい、趣味やスポーツ仲間を見つけない、または海外の人々と交流したいといった、自身に有益な経験やつながりを求めている傾向があった。

一方、「現状維持」を回答したほとんどの人々は、現在の交流状況に満足しており、特別な変化を望んでいないことがわかった。これは、彼らが既存の関係やコミュニティに満足していることを示唆していると考えられる。「程良い関係性」と回答した人々は、交流を持つ一方で、ある程度の距離を保ちつつ交流を楽しみたいというニーズを持っていると考えられる。最後に、「高齢者のための交流」に関する回答では、高齢者の安否を確認するために積極的な交流が必要であるとの回答が見受けられた。このような回答は、地域社会において高齢者との連絡やサポートが重要であることを示唆している。高齢化社会になる一方で高齢者を支えるもので、会話は大きな存在になっているのかもしれない。高齢者の孤独死が増えている中、さりげない会話で一つの命を繋ぎ止めることができることを学んだ。

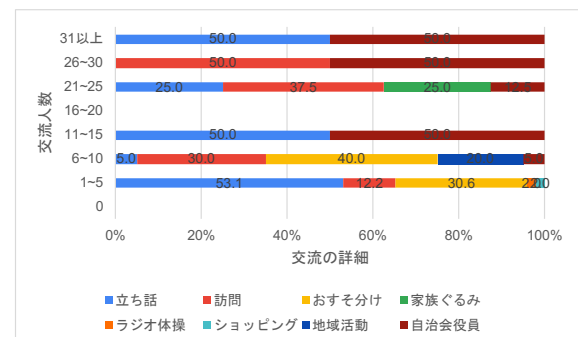


図6. 交流人数とその交流の詳細 (n=83)

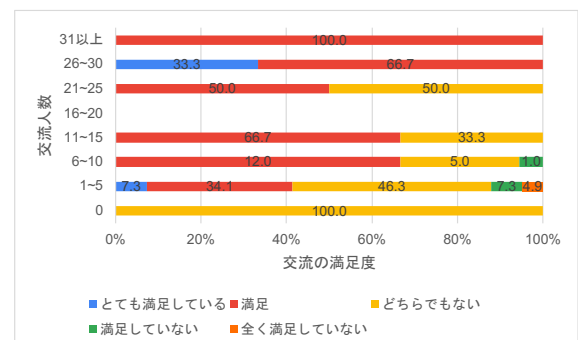


図7. 交流人数と交流に対する満足度 (n=71)

表1. 今後の交流のあり方 (n=36)

特性	記述内容
高齢者のための交流	特に独居の高齢女性型が不安なく暮らしているか？ 地震対策は大丈夫？困っていることはないか？ まだ、お顔もわからない方もいらっしやいますし、 なかなか出歩く方も少ないので、ゴミ捨て場でも顔を見て お話しできるようにしている。
	単身高齢者が多いエリアなので、日常の挨拶程度でも、 どのような人とも欠かさず交わらせるようになりたいです。 あまり顔をみかけないな、何かあったのではないかな、 と気づける機会にはなると思います。
	高齢化に伴い、人との交流が減ってきている 近隣の方が高齢になってきたので買い物等が 一緒にできればいい(自分が運転)と思っている。
交流を増やしたい	同じ町内会の方と、もっと交流する機会を増やしたい
	隣家より大きい単位で増やしたい 同級生、会社OBなど気心が知れた人との交流を増やしたい。 ご近所との交流拡大。
有益な交流	若者との交流を増やしたい
	共通の趣味、話の合う方と交流を増やしたい
	楽しくなれるような人や、学べるようなひと
	趣味やスポーツ関連の交流を時間が取れるようになったらしたい。
	趣味のサークルを作り交流を増やしたい
	高度な技術を有する外国人
	ウォーキングサークルの新しい仲間を増やしたい
	若い世代の人との交流
	若者とコミュニケーションをとりたち
	老若男女問わず様々な人と増やしたい
野菜作りによる交流をもっと増やし野菜作りのヒントを取得したい、 何ごとも一番だと思っている人、負けず嫌いな人 お金をかけない趣味の同好会を増やしたいと思います。 町に来られた外国人との交流を増やしたい 同世代の人との交流が安心する。 同年輩、同じ趣味	
現状維持	人がどんどん少なくなり交流を増やすのは無理、 どうやっても減っていきます。 あまり思わない 今のままでいい 現状を維持したい 現状でいい 地域にはクレマーのような老人も見受けられるので なんとかしたい。今まで通り仲良く交流していけたら良い と思っている。 今まで通りでよい どちらでもよい この年齢になると新しい人との交流はむずかしいと思う。 増やせることはないと思います。この先家族、友人、 親戚とおだやかに過ごせれば、又隣家のうわさ話(悪い)がなくなる ことを願っている。
	ある程度の距離をもっていきたい 家の内側の中までさぐるように話を 掘り下げてくる人の交流を減らしたい いきつけの店とか見つけたい、 ぐいぐいこれならいい関係がよい 来るものは拒まず去る者は追わず、 自分のエリア(地域環境)を破壊するものは、徹底に対抗
	程よい関係性

## 7. まとめ

### 1) 地域交流とまちづくり活動の関係性

地域居住者同士の交流頻度が地域居住者では、まちづくり活動への積極的な参加が見受けられ、地域社会全体の連帯感と協力関係が強化されていることが明らかになった。特に、徒歩や自転車を利用する住民が地域内での「立ち話」を通じて積極的にコミュニケーションを取っていることが示唆され、地域まちづくりにおいてこれらの要因を活かす取り組みが有用であることが示唆される。地域交流がまちづくり活

動と連動することで、地域社会の発展と持続可能な未来への道が拓けると考える。

### 2) 環境的要因について

環境的要因も地域交流に大きな影響を及ぼすことが明らかになった。例えば、職場や学校が住んでいる地域から近い場合、住民同士のコミュニケーションが増加し、地域社会の連帯感を高める要因となる。また、身近な移動手段の提供や共有空間の整備が、地域住民間のコミュニケーションと地域交流の促進に寄与する可能性が考えられる。地域環境が住民のコミュニケーションをサポートする役割を果たすことは、地域社会の健全な発展に不可欠である。

ある地域の環境的要因は、その地域の文化や歴史や、住宅地のデザイン、公共スペースの配置、歩道の整備、交通インフラの計画が住民間のコミュニケーションと交流にどのように影響を及ぼすのかを研究する必要があると考える。より具体的な文化的な行事、祭り、伝統的な活動が住民間のつながりに及ぼす影響を評価し、地域のアイデンティティと交流の関係性を調査することが重要であると感ずる。

### 3) 地域居住者の考える地域交流の満足度

アンケート結果から、地域居住者は地域交流に対する満足度が高い傾向が見受けられた。さらに、交流人数の増加が満足度を高める一方で、過剰な社交活動を求めていることが示された。個人的な成長や社会的な関係性の向上に対する願望が地域居住者の交流に影響を与えており、地域まちづくりにおいては住民の意見や要望を尊重し、バランスを取る取り組みが重要であると考えられる。

地域居住者の求める「有益な交流」は、地域社会の多様性と包括性に重要な影響があることがわかった。異なる年齢層、人種、趣味が交わり、新たな文化やコミュニティを形成することで、地域の発展とまちづくり活動の活性化に寄与する機会が広がる可能性がある。

地域居住者の多くは「有益な交流」を求めているため、多様性を尊重し、新たな文化やコミュニティを形成することが地域の発展とまちづくり活動の活性化に寄与することが必要である。文化的多様性を活用し、異なる年齢層の交流や趣味の共有、共同プロジェクトが、地域社会に新たな活気をもたらすことが地域社会の連帯感と協力関係を高める鍵となる。

### 参考文献

前項と同様である。